

## 巻頭エッセイ

# 豚バラ

一般財団法人 民事法務協会 監事 余田 武裕

あと数か月で仕事を辞める予定である。肩書を失い、無職になることに不安はあるが、仕事に縛られないという開放感と、やりたいことが自由にできるという期待感で溢れている。

仕事を辞めたら、まずは、ゆっくりと旅行がしたい。行きたい場所はたくさんあるが、差し当たって、懐かしい九州各地を訪ねたい。博多では馴染みの焼き鳥店に行き、豚バラを食べ、それから九州内の温泉地をめぐる。豚バラ、それは、串焼きの中の人気メニューの一つである。豚バラの形は、地域や店によって様々ようであるが、私の中での豚バラは、豚のバラ肉とたまねぎが交互に刺してある串焼きである。塩焼きの串を、特製たれに浸して食べる。素朴だが、美味しい。付け合わせのキャベツと一緒に食べると最高である。

豚バラを食べると、決まって学生の頃を思い出す。私は、学生の頃の4年間、長期休暇である夏休み、春休み、年末年始の期間中、福岡市内の焼き鳥店でアルバイトしていた。夕方4時頃から深夜1時頃までの約9時間、ランニングシャツに半袖のハッピーを着て、ねじり鉢巻き、運動靴の姿で、接客、テーブルの片づけ、皿洗い、店内清掃など、店の中を休む暇なく走り回っていた。注文を聞き違えてお客から強く非難されるなど、接客対応に苦労したこと

もあった。人気店だったので仕事が忙しく大変だった上、給料は深夜のアルバイトとしては安かった方であった。しかし、私は、その仕事と店長に魅力を感じ、辞めたいと思ったことはなかった。特に、店長のクレーム対応は素晴らしかった。謝るべきときは、誠意をもって謝り、理不尽な要求には毅然とした態度で対応されていた。質の悪い酔っ払いに対しても上手に対応されていた。また気配りも上手で、私に対応に困っていると、店長はすぐに現れ、対応してくれた。様子を見ながら声を掛けてくれたり、休憩時間にカップラーメンをくれたり、私たち従業員に対する気配りも忘れない方だった。いつか、店長みたいな頼もしい人になりたいと思っていた。先輩も私にとっては兄貴みみたいな存在で、いつも頼りにしていた。その先輩は、私に、将来は地元に戻って、自分の店を持ちたいと言っていた。いつか、偶然入った店が先輩の店だったというような、感動的な再会ができればいいなと思っている。

私が就職先として窓口業務がある職場を選んだのは、お客さんとの楽しいふれあいの魅力や店長の接客技術に憧れを抱いていたからだと思う。窓口対応しながら、時折、頼もしかった店長の姿を思い出していた。その後、様々な仕事を通じて、たくさんの尊敬できる先輩や上司に恵まれ、見習うべ

き接客（折衝）技術は増えていった。どれもなかなか真似ができるものではないが、今も私の手本となっている。

卒業も近くなり就職活動していた頃、店長から、このままこの会社（店は会社の直営店）に就職しないかと言われたことがある。あの時、店長の言われるまま、あの会社に就職していたら、今頃は、自分の店を持ち、馴染みのお客さんに支えられながら、今とは違う人生を楽しんでいたのではないかと思うこともある。人生はそんなに甘くないとは思ってはいるが、豚バラを食べると、アルバイトしていた頃のことを思い出

し、つい妄想してしまうのである。

男性の平均的な健康寿命は約73歳といわれている。健康寿命とは、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間のことである。私は、これまで不摂生してきたので、最近、身体のあちこちが故障してきており、改めて健康管理の重要性を痛感しているところである。そこで、仕事を辞めたら、のんびりと温泉に浸りながら、やりたいことがやれるための健康寿命の延ばし方と、今後の人生の楽しみ方について模索することにした。